

○日本帰化植物誌資料 (2)\* (浅井康宏) Yasuhiro ASAI: Materials for the naturalized flora of Japan (2)

7) コメツブウマゴヤシについて *Medicago lupulina* L., Spec. Pl. 779 (1753) の我国への侵入は可成り古いもののように徳川時代後期とされるが、現在では各地の沿海砂地を中心に広布しているのが認められる。

ところで本種にも若干の変異品が知られているが、中でも果実や茎、花梗、葉柄などに腺毛を有するもの var. *glandulosa* Neir. がある。筆者もかねてから、このようなものの存在に気付いていたが、これを故榎山庫三氏は神奈川県葉山のものに基いて、ネバリコメツブウマゴヤシとして記録されている(野草 昭和22年7号, 85頁)。この点については、かつて同氏と書信上で種々と意見の交換をし、当該標本が手元に保管されている旨(昭和31年9月8日付)を承ったことがある。しかし、この形質(腺毛の有無)は種々の段階があるようで、Shinners (1956) も述べているように、これは恐らく品種のランクで扱った方が、より適切なものと考えられる。

因みに本種は通常一年〜二年草とされているが、多年生(少なくとも4年以上)で茎は多数分岐し、随所から根を生じ、密にマット状となるもの var. *cupaniana* (Guss.) Boissier—*M. cupaniana* Gussone も知られている。この種のもは現在、原産地のヨーロッパからアメリカ合衆国(California 地方など)へ帰化、住宅地の芝生などに侵入し、厄介な雑草となっている由である。このような系統のものを我国でも区別(オニコメツブウマゴヤシと仮称)するか否かは、今後の課題であろう。

8) シロバナビロードモウズイカ(新称) *Verbascum thapsus* L., Spec. Pl. 177 (1753) はヨーロッパの原産で、英名 Flannel plant が示すように特異な草姿をした大型の二年草であり、北アメリカにも帰化している。我国へは明治年間に観賞用として輸入、栽培されニワタバコと呼ばれたが、特に第二次大戦後には種子が種々な輸入雑穀などの夾雑物として侵入し、現在、沿海地や市街地の荒地などのほか、放牧地にも散見される。ところで本種は通常黄色花をつけるが、これに混じて白花のもの form. *candicans* House も稀に認められる。これに上掲の和名を与えておきたい。

9) オオシロツメクサ(新称) *Trifolium repens* L., Spec. Sp. Pl. 767 (1753) は古く徳川時代より主に人為的に我国へ導入され、現在では市街地から山間部に至るまで、広く各地に帰化植物として君臨している。本種の基本型 form. *repens* の花序は径 1.5〜3 cm 許、小葉は長さ 1〜2.5 cm 許のものとしてされている。ところで近年、各地の市街地などに更に大形のものゝ散見され、場所によっては却ってこのようなものの方が多い。すなわち花序は径 3〜3.5 cm、小葉は長さ 4 cm 以上にもなる。これは所謂 Ladino clover と称される栽培起源のもの form. *giganteum* Lagreze-Fossat (1847) で、これをオオシロツメクサと呼んでおく。

\* 本誌 62(3): 14-17 (1987) から続く。

10) オオキンケイギクについて *Coreopsis lanceolata* L., Spec. Pl. 908 (1753) は明治年間に北アメリカから観賞用として導入されたが、現在では各地の海岸砂地や河原などに逸出し、大群落をなして生育しているのが認められる。ところで現在、我国で見られるものは茎葉などが多毛なものが多く、これは var. *villosa* Michaux にあたる。この点については、既に北村四郎博士も同様の見解(朝日百科・世界の植物 1:162, 1978)を示しておられる。

元来、本種の基本形 var. *lanceolata* は茎葉がほとんど無毛に近いものであり、このようなものも我国で認められる。そこで前者をアラゲオオキンケイギク、また後者をケナシオオキンケイギクとして、一応区別しておくこととしたい。

因みに本種の葉には可成りの広狭の差が認められ、その極端に細めのものに var. *angustifolia* Torrey et Gray (1841) の名が与えられている。これをホソバオオキンケイギクと呼んでおくと、恐らく品種のランクで扱った方が適切なものと考えられる。

11) シロバナセイヨウウンラン(新称) セイヨウウンラン(ホソバウンラン) *Linaria vulgaris* Hill, Herb. 109 (1756) はヨーロッパの原産で、北アメリカにも帰化している多年草である。我国へは古く園芸植物として輸入、栽培されたが、特に第二次大戦後には牧草などの夾雑種子として侵入し、北海道や本州中部などの寒冷地を中心に帰化している。ところで本種は通常濃黄色の花をつけるが、稀に帯白色の花冠を有するもの form. *leucantha* Fernald もある。これに上掲の和名を与えておく。

12) マルバハルノノゲシ(新称) *Sonchus oleraceus* L., Spec. Pl. 794 (1753) はヨーロッパの原産で、現在、北アメリカなどにも帰化し、汎世界的な雑草となっており、我国でも各地に広く生育している。ところで基本形 form. *oleraceus* の葉は羽状に分裂しているが、その中にほとんど分裂しないもの form. *integrifolius* (Wallr.) G. Beck も認められる。これを上掲の名で呼んでおく。

13) ボウズヘラバヒメジヨオン(新称) 北アメリカ原産で明治年間に侵入したヒメジヨオンには、我国でも古くから舌状花を欠く型(ボウズヒメジヨオン)が知られていた。一方、筆者もハルジヨオンにも同様のものが存在することを報告(植研 48: 67, 1973)しておいた。ところで現在、山間地域に多い同じく北アメリカ原産のヘラバヒメジヨオンにも、このような舌状花を欠くか、あるいは極端に萎縮した形のものが認められる。これをボウズヘラバヒメジヨオン *Erigeron strigosus* Muhlenberg ex Willd. form. *discoideus* (Robins.) Fernald—*E. strigosus* var. *discoideus* Robinson と呼んでおきたい。

14) ホトケノザについて 周知のようにホトケノザ(サンガイグサ) *Lamium amplexicaule* L., Spec. Pl. 579 (1753) はヨーロッパを始め、北アフリカ、アジア各地に分布し、また北アメリカなどにも帰化している汎世界的な雑草である。ところで本種は我国でも北海道から沖縄までの各地に生育しているが、古くからの在来品とは別に特

に第二次大戦後、主に北アメリカなどから輸入された諸物資に随伴し、二次的あるいは三次的に帰化した別系統のものもある。筆者はその事実を、各地のものについて確認している。因みに本種自体を史前帰化の概念に含める考え方もあるが、ここではこの点には触れぬことにする。

このような種としては同じであっても、欧米系統のものが侵入したものを、広い意味では帰化の範疇に含めて考えるのが妥当であろう。これを筆者は従来、いわゆる“部分(的)帰化”と称して来たもので、この例としてイヌホオズキやシロザ (*s.l.*), タガラシなどを挙げている。ところで、このような汎世界的な生育(分布)種に関連して、さらに別系統の二次的侵入者の存在を考慮すると、種々の問題点が浮き彫りにされる。その一つが本稿で扱っている種内変異品の問題である。例えば従来、我国では本種の白花品がシロバナホトケノザ *form. albiflorum* Hiyama の名で扱われて来た。しかし欧米のものを同一種と考えれば、彼地でも *form. albiflorum* D. M. Moore—*var. album* Pickens et Pickens などの学名が散見される。

このように従来、我国で汎世界的な雑草とされているものの種以下の rank に与えてきた学名(品種あるいは変種)には、我国よりも当然旧い学名の歴史を有する欧米諸国において、既により古い名が存在しているのが容易に想像される。さらに純然たる帰化植物に属するものについては、当然、彼地で細かい変異品についての学名が設定されていると考えるべきであろう。したがって、これらの変異品に該当する学名が我国で見出されなかったと言った安易な考えで、新たな品種名などを創定(記載)することは誠に慎まねばならない。すなわち敢えて、これを行ったとすれば結局のところ、我国におけるこの種の文献量(検索)の不足(不備)以外の何物でもないことに帰着するであろう。ただし渡来後、我国において新たに生じたもの、あるいは彼地において未記載のものも存在する可能性があり、これらについては充分かつ慎重な検討を加えた上、対処すべきである。

因みに、このような汎世界的な分布(生育)を示す雑草で、いわゆる在来品と二次的な侵入(帰化)品とが存在(共存)するような場合には、例えば帰化率の算定などにおいても慎重な配慮が必要とされる。すなわち、その基準となる在来品自体の判定(認定)をどう扱うかによって、その数値は当然異なってくるであろう。特に、このような傾向(可能性)が高い第一次帰化地(たとえば港湾や空港など)においては、その帰化率の検討に際して十分な考慮を要するのは論を俟たない。

なお本種で多数の小形の管状閉鎖花のみを密に着けるものを、彼地では *form. clandestinum* (Reichb.) G. Beck の名を与えている。すなわち小さな萎縮状の閉鎖花のみを着ける一型であろうが、このようなものを我国でも果して区別する必要があるか否かは、今後の研究課題と思われるが、ここでは一応ツボミホトケノザと呼んでおく。

15) ランシャナスについて *Solanum elaeagnifolium* Cavanilles, *Icon. Pl.* 3: 22, 243 (1794) は、第二次大戦後に神奈川県横須賀市の長浦港での佐野純雄氏の採品を久

内清孝先生が同定され、上掲の和名を与えられた(植研 26: 139, 1951)。その後、沖繩でも見出され初島住彦博士は本種にグミバナスなる名を新称されている(琉球植物誌537, 1971)。いずれも、その葉などの性状に基いたものである。

しかし初島博士は更に同書の追加・訂正版(1975)上で、久内先生と同名のラシヤナスを新称とし公表されるに至り、識者はその処置に対して理解に苦しんだ次第である。なおグミバナスにラシヤナスなる先行和名が既に存在することは、久内先生自身も指摘(植研 46: 334, 1971)されている。

ところで本種の花は通常淡青紫色を呈するが、最近、筆者は神奈川県横浜港に近い向陽の荒地で、本種の白花品 form. *albiflorum* Cockerell を得た(1986. 8. 20)。これにシロバナラシヤナスの和名を与えておく。因みに本種の茎葉や果実は有毒で、彼地において動物が中毒を起したことが報告されている故、その毒性の多寡は別として一応の注意が肝要であろう。

終りに本稿を御校閲いただき、種々御教導を賜った故原 寛先生ならびに御援助下さった小山鐵夫博士に対し、衷心より厚く御礼申し上げる。

Generally naturalized plants belong to highly variable species with a number of variants even in their original range. In this series of papers the author tries to make critical identification of some alien plants established in Japan so as to show which varieties or forms they belong to. The nine species of naturalized plants treated here all properly belong to certain variants so recognized in their own native lands. They are: *Medicago lupulina* L. var. *glandulosa* Neilr., *Verbascum thapsus* L. form. *candicans* House, *Trifolium repens* L. form. *giganteum* Lagr.-Foss., *Coreopsis lanceolata* L. var. *villosa* Michx. and var. *angustifolia* Torr. et Gray, *Linaria vulgaris* Hill form. *leucantha* Fern., *Sonchus oleraceus* L. form. *integrifolius* G. Beck, *Erigeron strigosus* Muhl. form. *discoideus* Fern., *Lamium amplexicaule* L. form. *albiflorum* D.M. Moore and form. *clandestinum* G. Beck, and *Solanum elaeagnifolium* Cav. form. *albiflorum* Cocker.

(東京歯科大学)

□中国科学院中国孢子植物志編輯委員会(編)：中国真菌志 第一卷 白粉菌目 552 pp. 1987. 科学出版社, 北京. 8. 40元. 中国ウドンコカビ目のモノグラフ。22属, 変種も併せて 256 種類(補遺共), 全てに記載・図・寄主・分布・コメントを付す。実利と無関係な菌群も含めた全体の完成が待たれる。

(三浦宏一郎)